



## 第1戦

## OKAYAMA GT 300KM RACE

## 岡山国際サーキット

**決勝** 4月12日(日)

天候: 晴れ/曇り コース状況: ドライ

2026年SUPER GTシリーズ開幕戦は、4月12日に岡山国際サーキットで300kmの決勝レースが行われた。今年は予選日から天候にも恵まれ、決勝日も朝早くから開幕を待ち侘びた熱心なファン1万6,500人がサーキットに詰めかけた。レースはこれがG実戦デビューとなるト部和久がスタートを担当。フロントローから2位のポジションを守り、ライバル勢がピット作業をする間にトップに立った。ト部は中盤までレースをリードして堤優威に交代。ピット作業を終えると2位に戻り、その順位を守ってチェッカー。表彰台を獲得し、幸先の良いシーズンスタートを切った。

**決勝：2位**



決勝日は11時50分から20分間のウォームアップ走行が行われた。まずはト部がコースインし堤に交代。ベストタイムは1分27秒880と29台中13番手のタイムだったが、クルマの動きに問題ないことが確認できた。

グリッドワークを終えた13時20分、気温24℃、路面温度39℃という初夏のようなコンディションの中、岡山県警の白バイ4台が先導するパレードラップがスタート。続いてフォーメーションラップを続け13時25分に決勝レースがスタートした。

ステアリングを握ったのはト部で、ポールシッターの777号車アストンマーティンの背後に着き1コーナーへ。2周目にはその差は1.4秒となったがタイヤが温まってからはそれ以上離されない走りを見せ、3位以下を引き離しにかかった。やがて3位の31号車LC500hに接近されるもト部は隙を見せず2位をキープした。13周を過ぎるとトップとの差は2秒に開き、2位争いは接近戦が続いた。20周目のヘアピンではストレートスピードに勝る31号車LC500hに並び掛けられたものの、ト部は順位を守っていく。

25周目に31号車LC500hが先にピットイン。さらにトップの777号車アストンマーティンも早めのピットインをすると、ト部はトップに立つこととなった。さらに2位とは5秒差があり単独の走行となったが、2位の車両に対しドライブスルーのペナルティが科されたことで、代わって2位に順位を上げた車両との差は14秒となった。ト部はストレスなく走行を周回を続け、レースの折り返し点近くの38周目にピットイン。ここで堤に交代してフレッシュタイヤに交換し給油も済ませコースへ。

この時点でまだピット作業を済ませていない車両が4台あり、堤は777号車アストンマーティンの8.5秒後方の6位となった。53周目にピット作業をしていなかった最後の1台がピットインすると、堤はトップと10秒差、3位とも10秒差の単独2位を安定したラップタイムで走行することに。終盤にはトップとの差を7.2秒まで縮めたが追い詰めるまでには及ばず、2位でチェッカー。新体制の初レースで表彰台を獲得することができた。

次の第2戦は5月3～4日に富士スピードウェイにおいて3時間レースとして開催予定。





## ドライバー 堤 優威

「やれることはすべてやった結果が2位だったのは、非常に悔しいですが、31号車に抜かれていたら3位だったところが2位でゴールできたのは、今後のシリーズを考えれば良かったのかなと思います。それよりもト部選手が初めてのGTレースをミスなく終えられたことで、それは本人の自信になると思いますしチームからの信頼感も生まれたと思うので、そういった意味ではすごく収穫のあったレースではなかったのかなと思います。あと速かった車両が2台、ペナルティを受けたのもあり、運が重なっての2位ということもあったのでそれはラッキーだったかなと思います。去年は何をしてもダメが一番きつかった年だったので、今後に向けては良いレースになったと思います」

## ドライバー ト部 和久

「(競った31号車は)ストレートが速く重量も軽いのでブレーキも良く止まるので抑えるのは大変だったのですが、最低限のブロックのみで抑えきれたので良かったのではないかと思います。自分がベストな状態で抜かれてしまったらしょうがないと割り切って走っていました。(タイヤがタイヤかすを拾う)ピックアップもありましたし。スタート前は緊張するかなとは思いましたが、楽しみだなと思う方が大きく、自分自身もっと早くペースが落ちて早めにピットに入るのではないかなと思ったのですが、チームももっと引っ張れという指示で信頼感も生まれましたので、開幕戦としては良かったと思うのですが、2位でうれしいというより悔しい気持ちの方が9割9分大きいです」



## 監督 加藤 寛規



「完璧に近いレースができたにもかかわらずそれでも届かなかったのが、ライバルが強かったのだと思います。スタートを担当したト部はルーキーながらしっかり落ち着いて持ち前のレース強さを見せてくれましたし、それを引き継いで堤も非常に良いペースで走ってくれたのですが、厳しいレースになりました。全体的に見てもタイム差が大きいわけではなく、今年は高いレベルをそろえて来たなと感じましたから、今後のレースは厳しい戦いが待ち受けているなと改めて実感した部分もあります。2位は悔しいですが、ルーキーがちゃんと機能してくれましたしチームもミスなくサポートしてくれたので今後につながるレースになったと思います」

